

肥後グリーン（半促成・立体）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
作型													
主な作業	定植		着果	交配	摘果	収穫						播種	鉢上げ

技術体系

1 作型の特徴

播種が12月上旬から2月上旬、収穫が5～6月のハウス半促成栽培に適し、抑制栽培には不向きである。

また、立体栽培とし、ミツバチ交配、一つの一果着果とする。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

(1) 温度

生育には高温(30℃)を必要としない。

(2) 光

光飽和点は 50,000 ルックス～ 60,000 ルックス

(3) 土壌条件

排水の良い砂壤土、pH6.5～6.5
メロンの根は土質の違いに対する適応性は広いがさくもつの中では最も酸素を好む。

(4) 登熟日数

60～65日を要し晩熟である。

4 施設装備

(1) 連棟ハウス

(2) 暖房機

(3) 灌水装置

(4) カーテン・トンネル

5 経営目標

- (1) 収量 3.2 t / 10 a
- (2) 投下労働時間 400時間 / 10 a
- (3) 所得率 50%
- (4) 経営規模 40 a

(家族労働力2人の場合)

栽培技術

1 品種と特性

- ①生育には高温(30℃以上)を必要としない。
根量は少ない。草勢は中位である、雌花の着生及び着果性は良好である。
- ②果実は、1.5～1.7 kgと大きく、やや縦長で外皮は暗緑色のネットメロン。ネットの発生は遅く、着果後25日頃より始まる。
- ③果肉は5～5.5 cmと非常に厚く、淡緑色で糖度は16～17度。
繊維がなく、多汁であっさりした上品な味である。
- ④登熟日数は60～65日を要し、晩熟である。
裂果や発酵果はほとんど発生しない。
収穫後5～7日が食べ頃で、2週間は変質しない。このことは遠距離出荷や休市他対応に有利となる。
- ⑤うどんこ病には罹病するので、防除が必要である。

2 育苗

(1) 播種

リン酸を十分に含み通気性良好な床土を使用し、播種箱等に直接播種する。発芽温度として地温28～30℃以上を確保し、発芽後は地温を2～3℃下げ、徒長を防止する。

播種期は、気象タイプによる地帯区分及び施設等によって決める。

地帯別の標準播種期	
タイプ	播種期
I	12月中旬～1月上旬
II、III	12月中旬～1月中旬
IV	1月下旬～2月上旬

(2) 鉢上げ

子葉が、8分展開時に10.5cmポットに鉢上げし、ていねいに灌水する。

(3) 鉢上げ後の温度管理

地温20～25℃、昼温27～28℃、夜温17～18℃を目安とする。活着後は徒長防止のため、気温を2～3℃下げ、水管理も灌水は控え目とする。

(4) 定植前の苗のならし

定植7日前頃から、地温15℃、昼温23～25℃、夜温12～13℃を目安として、徐々に温度を下げる。水分は日中少し萎れる程度まで控える。

(5) 育苗日数

1月中旬までの播種では35～40日、それ以降は30～35日程度の中苗もしくは若苗とする。

45日以上の上化苗は避ける。

本葉4枚で摘心する。

3 本圃の準備

前作の収穫後、深耕及び土壌消毒を行う。

ハウス内外の排水に留意するとともに、堆肥の投入、施肥、耕耘を行い、できるだけ30～40cmの高畦にする。

土壌が適湿の状態です透明マルチを張り、定植期までに16℃以上の地温の確保を図る。定植の20日以上前（1～2月は30日以上前）までにこれらの作業を完了する。

特に、マルチング前の土壌水分がポイントとなる。水分が多いと、活着や生育は良好ではあるが、生育の後半に樹がバテる恐れがある。逆に、乾燥しすぎると、活着や生育の不良、生育むら等を生じる原因となる。

(1) 施肥

交配時に、最大葉の葉身長が20～23cm程度となるような施肥を行う。

基肥は、土壌分析によって決め、残効や肥沃度によって増減する。肥料は、有機質あるいは緩効性肥料を主体に施用する。

施肥量	(kg / 10a)		
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
基肥	5～8	—	5～8

※リン酸は土壌分析値によって加減する。

4 定植

(1) 栽植様式

立体栽培で子蔓2本仕立てを基本とする。

畦幅200cm。1条植えの場合は株間40cm、2条植えの場合は80cmの千鳥植えとする。

メロンの品質や作業性からは2条植えの方が望ましい。

10a当たり1,250株で、これ以上の密植は避ける。

(2) 定植

晴れた日の午前中に、ていねいに浅植えする。

定植直後から4～5日間は、地温16℃以上、昼温30℃、夜温15℃を目安にやや高めの温度管理を行い、活着を促進する。

5 生育期の管理

(1) 温度管理

品質を最重点とし、そのためには収穫時まで十分な草勢を維持することが重要となる。特に、根を深く広く張らせることに主眼をおく必要がある。

子づるが伸び始めるころから、地温16℃以上、昼温27～28℃、夜温10～12℃を目安として、日中はビニルカーテンを開け、積極的に換気を行い、がっちりとした茎葉にするための管理を行う。沿岸部でのカーテンの使用は3月末までとする。

気温は、光合成・転流作用の関係から、午前中はやや高め、午後は低めに管理する。

(2) 整枝

子づるは2本仕立てで着果節位は10節前後として2、3本残し他の孫づるは摘除する。上位2節の孫づるは遊びづるとして残し、草勢に応じて調整する。

交配前までに、主枝は20節程度で摘心する。結果枝は、2葉を残して摘心する。

なお、作業を進めるにあたって次の点に留意する。

①ハウス全体のつる先を揃える。

②開花を揃え、一斉着果に努める。

雌花が同一日に開花、着果するよう、特に留意する。

6 交配期以降の管理

(1) 交配

ミツバチで交配し、必ず交配日を記入する。

(2) 雄花及び花弁除去

菌核病の予防のため、できるだけ早く雄花や果実についた花弁を取り除く。

(3) 摘果

鶏卵大の時期に、縦伸びした果形の良好なものを1つる1果だけ残し、他は摘果する。

また、ネット発生後、2番果がよく着果するので、必ず摘果する。

(4) 玉つり

野球ボール大の時期に、必ず玉つりを行う。

肥後グリーンは玉肥大に優れ、かつ大きさの割に重いため、ひも等は丈夫なものを使用する。

(5) 温度管理

①交配期

昼温27～28℃、夜温15～18℃とやや高めにする。昼間の換気や夜及び早朝の加温機利用によって湿度を下げ、ミツバチの活動を活発にし、受粉しやすくする。

②摘果～果実肥大期

昼温27～28℃、夜温15℃、空調湿度70%程度とし、果実の肥大を促す。

特に冷風が直接果実に当たらないよう換気の方法に

も注意を払う。

③硬化期

肥後グリーンは果実肥大性に優れ、玉がゆるみやすい。そのため交配後12～13日頃の黄径が10cm程度から硬化させる。

④ネット発生期

他品種より遅れ、交配後22～23日頃より果底部から発生する。この時点での黄径は13cm程度が理想である。

昼温27～28℃、夜温17～18℃とする。

4～5日間だけ午前9時頃まで換気を遅くし玉が濡れるようにする。あまり強い蒸し込みは避ける。

①ネット完成期～収穫期

品質向上、糖度上昇のため、より積極的に換気を行い、採光と空間湿度の低下に努める。

昼温27～28℃、夜温15℃とする。

最低気温が15℃となれば、ハウスのサイドや天窓を夜間も開放する。

(6) 水管理

①定植～活着

十分な湿りを与え、活着を促進させる。

②活着～交配期

乾燥気味に管理し、地上部、地下部の充実を図る。

③着果～果実硬化期

着果を確認すれば、少量の灌水を行い、果実の肥大を促進させる。

なお、肥大が順調であれば、灌水は控える。

果実硬化期からネット発生前までは、灌水を控え乾燥気味に管理する。

④ネット中期

ネットが仕上がるまでの間、数回の灌水を行う。ハウス内湿度の確保の点から、少量の畦間散水も効果的である。

⑤仕上げ期

ネット発現が完了した頃より、徐々に土壌水分を減らし、十分な換気を行って、ハウス内の空中湿度を下げ、糖度の上昇と品質の向上を図る。

肥後グリーンは、収穫前に萎凋するような強い水切りを行うと、糖度は18～19度と高くなるものの果汁が少なく、食味の劣る果実となる場合がある。

(7) 病虫害防除

病害としては、うどんこ病、べと病、つる枯病、えそ斑点病、褐斑細菌病、斑点細菌病、菌核病、ウイルス病等がある。

害虫としては、アブラムシ、ハダニ、ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ、マメハモグリバエ等がよく発生する。

このため、早めに防除を行う。

7 収穫

収穫にあたっては、次の点に十分な注意を払い、消費者に均一でかつ味で満足していただけるメロンを届ける。

- ①糖度を16度以上を原則とする。
- ②登熟日数は交配後60～65日。
- ③谷の下や土壌水分の多い圃場では、収穫を2～3日遅らせる。
- ④日持ち性が良好で、かつ裂果がほとんど発生しないため、若切りを厳に慎む。
- ⑤果梗基部のリングが黄色味を帯びる頃が収穫の目安とする。